
河城にとりの科学的？生活

さかまた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

河城にとりの科学的?生活

【Zコード】

N5753T

【作者名】

さかまた

【あらすじ】

幻想郷に高くそびえる妖怪の山に住む河城にとり。

彼女は今日も気ままに幻想を生きる。

そんな彼女と親友たちが織り成す物語。

プロローグ

川辺に小さな家がある。家主の名前は河城にとり。機械いじりと人間が大好きな風変わりな妖怪だ。

今日も彼女は何処からか拾つてきたガラクタをいじつている。ふいに家の戸をコンコン、と叩く音がした。どうやら来客のようだ。

「まったく、今いいところなのに。はいはい、今開けますよ」

彼女はそう言って立ち上がると戸の前まで行き、戸を開けた。

「おっ、盟友。久しぶりだね。また面白い物を持ってきてくれたのかい？」

彼女が盟友と呼んだ人間は、そう聞かれると背中に背負つていた箱をにとりの前に置く。

「ふーむ、変わった箱だねえ。てっぺんから細い針金みたいなのが出てるね。あと、側面にはクランクが付いてる」

にとりは箱の外見をじろじろと見たり、側面のクランクを回したりしている。

「うーん、何も起こらないなあ。それにしても、このクランクやけに重いね……え？ もっと早く回してみろって？ うん。わかった」そう言われてにとりはクランクを皿一杯の力で回す。

回し始めてしばらくすると、箱の上部にある針金が光り出した。

「おおっ！ 光った光った！」

にとりが驚きの声を上げる。しかしにとりがクランクを回す手を止めると、すぐに針金は輝きを失つてしまった。

「ありや、もう終わり？」

「ふう……「つーん、確かに面白い機械だけど、ずっとクラシクを回してないといけないのは疲れるね」

盟友がそれに頷く。

「これをどうにか改良すれば、こんなちっぽけな針金だけじゃなくてあの吸血鬼の館にあるらしいグリルとかいうやつも使えるようになりそうだね。電気の力で炎を作つて操る……想像しただけでも楽しくなってきたよ」

にとりが声を弾ませて言つ。

「そういえば聞いてなかつたけど、この機械はなんて名前なんだい？」

？盟友

にとりが聞くと、盟友は”えれきてる”と答えた。

「エレキテル？変わつた名前だね」

それを聞いた盟友は少し苦笑し、それから一人は世間話をしたり、機械をいじつて過ごした。

「でさ、そのせいで前回は棍に負けちゃつたんだけど……ありや、もうこんな時間？ 盟友、そろそろ帰らないと危ないよ」

一人が会つた時には頂上に昇つっていた太陽が、もう地平線の向こうに沈みかけている。

「しつかし、こんな面白い物を作るなんてやっぱり人間はすごいね……私も頑張らなくつちゃ！ あ、このエレキテルもらつてもいいかな？ いろいろバラして中身見たいからね」

盟友は首を縦に振つた。

「本当？ ありがとう盟友！ ジゃあ次は私が何か盟友に作つて見せてあげるね！」

にとりは今日一番の笑顔を見せる。

「それじゃ盟友、また今度ね！」

そう言って二人はハイタッチを交わして別れた。

射命丸文のカメラ

人里の外れに一軒の家がある。その家主は、普通の人間なのだが一人で妖怪の山に何のためらいもなく入つて行くなど、どこか風変わりな点があるので道士かなにかの修行でもしているのではないかと人々から不思議がられていた。

太陽はもう昇つているが頂上まで昇るにはまだまだ時間がかかるようだ。

家主は朝食を摂りながら、今朝拾つてきた天狗が空からばらまいたのであろう新聞を読んでいる。

新聞によると幻想郷は昨日も平和でとくにたいした事件はなかつたようだ。だが今回は毎週恒例”今週の弾幕”コーナーがなかつた。カメラ故障の為お休み、とのことだ。カメラが故障したのなら天狗はあの子のところに持つていつただろうから、後で行つてみるかな、と彼は思った。

川辺のにとりの家に着くと、案の定彼女はいつもより慌ただしく動いていた。

「おや、盟友。……さては今朝の新聞読んで、カメラが私のところに修理に出されてると思ったでしょ？」

にとりはどうだ、と言わんばかりに得意げな顔をする。

盟友は照れ臭そうに頭をかきながら

「……当たり」

と呟いた。

「やつぱり！ しかしあの新聞からカメラが私のところにあると考
えるなんて、盟友は目の付け所が違うねえ。で、見てみたい？ カ
メラ」

「当然。何の為に朝からここに来たと思つてるんだい？」

盟友は即答する。

「うむ、盟友がそこまで言つなら仕方ない……これだあ！」

そう言つてにとりは大袈裟にカメラを空に掲げた。

「へえ、人里の写真屋が持つてるやつみたいに大きくないね。……

中身見ていい？」

「どうぞどうぞ。あなた様のお好きなように」

にとりはへらへら笑いながら冗談っぽく腰を低くして答え、カメラを渡す。

「よし、では早速……よつと」

盟友はカメラの裏側の蓋を開ける。すると糸巻に巻かれた薄い茶色の半透明の膜が現れた。

「なるほど、薄い感光板を糸巻に巻き付けてるのか。写真を撮つたらこれを回せば毎回撮るたびにカメラを開けなくて済むから、これなら弾幕の中でも何枚も写真を撮れるのも納得できるね」

盟友は分析しながら感心している。

「フィルムつて言つらしいよ。文さんが言つてた。あと本気出せばフィルムをおもいつきり速く巻けるらしいんだけど、それやると巻くのに集中しちゃって機敏に動けなくなるからたまに弾に当たつちやうんだって」

「へえ、フィルム、か。しかしあの素早い天狗が弾に当たるなんて、よっぽど本気で巻いてるときは集中してるんだ」

にとりの説明に相槌をうちながら盟友はフィルムを外してさらばに

奥をのぞく。フィルムの先には鏡が入っている。可動式のよつで、指で押すと上に跳ね上がった。どうやらこの鏡でどのように写るか確認し、撮る直前に鏡が上がって撮影する仕組みのようだ。鏡が上がったさらに先には大きなレンズがあり、こちらを見つめている。

「フィルム、鏡、レンズ。あとは……」

「カメラの右上のボタンを押す。が、ボタンは固くなつていて、作動しなかつた。」

「……シャッターが作動しなかつたから、悪いのはシャッターみたいだね」

盟友はカメラをにとりに返しながら言ひ。

「うん。まあ盟友が来る前に一回私も中を見て一応田星は付けてたんだ。あと悪いところはフィルムを付ける軸が歪んでたくらいかな。で、どうだった？ 楽しかつた？」

「もちろん。カメラなんて商売道具、写真屋は絶対触らしてくれないから、カメラは本でしかしくみは知らなかつたから、貴重な体験だつたよ」

「それはよかつた。ん？ その風呂敷に包んであるのは何？」

にとりが盟友が片手に持つている風呂敷を指して言ひ。

「今気づいたんだね……はい、差し入れ。」

盟友は風呂敷の包みを解き、包まれていたきゅうりを数本にとりに渡した。

「おおっ！ きゅうり！ 気が利くね、盟友。これで畳の後の修理も頑張れるよ。ありがとう！」

「どういたしまして。さて、差し入れも渡したし、帰らうかな」

「あ、待つて」

にとりが引き止める。

「お畳……食べてきなよ。せつかくこじまできたんだしさ」

「いいのかい？ じゃあ、お言葉に甘えさせてもらおうかな。」

「よーし、今日のお畳は一日漬けたきゅうりの漬物になすときゅうりの炒め物、後きゅうりチャーハンで決まりー。」

「これでもかってほどきゅうりづくしだね……」

盟友は少し苦笑する。

「えー、いいでしょ？ 今日は盟友がきゅうり持つてきてくれたんだし、悪くなる前に食べなきゃね！」

にとりが盟友に笑いかける。彼もそれに笑顔で返す。

「そうだね。じゃ、お昼の準備をしようか。僕も手伝うからさ」

「え？ 今日は盟友はお客様なんだから、手伝わなくていいよ……」

「いいからいいから。さ、始めよう」

太陽はいつの間にか頂点まで昇っていて、太陽の光を川の水が反射して輝いていた。

河城にとりの光学迷彩

新しい朝が来た。外では鶏が甲高い声で鳴いている。

彼は家から出て、天狗の新聞を拾いに行く。毎度のことながら、人里にまで新聞を配りに（ばらまきに）来る天狗はなかなか律儀な妖怪だと、ふと彼は思った。

「それに比べて河童は……」

そう言いながら彼は屈んで足元に落ちている新聞を拾おうとする。だが、

「？」

彼が新聞を拾おうとすると、新聞は彼を拒絶するかのように彼から離れていってしまった。

「河童が何だつて？」

聞き慣れた声にあわてて顔を上げると、目の前には青のワンピースに緑の帽子、左右で束ねた青い髪が特徴の彼の親友、河城にとりが立っていた。

「うわあっ！」

突然の出来事に彼は尻餅をついてしまった。

「あはははっ！ びっくりした？」

にとりは悪戯っぽく笑う。

「……うん、ホントにびっくりしたよ」

「やつたあ！ 実験大成功！ あと盟友、おはようー。にとりは笑顔で盟友に挨拶する。

「ああ、おはよう」と

盟友も笑顔で挨拶を返し、それから一人はぱしん、と手を合わせる。

「つと、まだ朝早いから外で騒いでたら迷惑だし、一旦家に入ろうか

「それもやうだね。わかつたよ」

そう言つて二人は盟友の家に入つていく。

「そりいえば盟友」

「ん、何?」

「さつき『それに比べて河童は……』って言つてたけど、なにと比べて?」

盟友は少し硬直する。

「あ、ああ。あれね。毎朝人里にまで新聞を配りに来る天狗は律儀だなあ、つて」

「ふーん。で、天狗に比べて河童は何?」

にとりはいつもより少し鋭い目で盟友を見る。

「気まぐれで悪戯っぽくて、子供っぽいなって思つた。あと……」

「あと何?」

にとりは膨れつ面をして言つた。

「……やることが面白い、かな」

それを聞いたにとりの顔が少し戻る。

「むう……最初はばかにされたような気がしたけど、やることが面白いくつてのはあんまり悪い気はしないね。でも子供っぽいってのは聞き捨てならないなあ、盟友?」

「……ごめん。あ、そうだ。今から僕は朝ごはん食べるから、にとりも朝から何も食べてないなら一緒にどう?」

「お、気が利くね盟友。じゃあ」一緒にさせてもらおうかな。あ、朝食に免じてさつきのことは許してやうつー」

「気が変わるの早いなあ」

盟友は苦笑して、朝食の仕度を始めた。

「うう」ちそうさま、他人の家で食べる朝食もなかなかいいもんだね」「まあ、普通は家に泊めてもらわない限りそういう朝食は他人の家じゃ食べないよね。……そういえばにとり

「
h
?」

「さつき実験大成功とか言つてたけど……新しい発明でも作つた？」
盟友がきく。

「……ん、別に新しい発明じゃな~よ。少し改悪……」
「……や、盟友にはお披露目してなかつたね」

「…… もやか」

「そう！ そのまさか！ 私、河城にとりの最高傑作の一つ、その名も光学迷彩～！」

「どうせ高らかにやつ言つて、リュックの中から半透明な雨合羽のやうなものを取り出した。

盟友は思わず拍手する。

「ふふふ、まあまあ抑えて抑えて」と

「でもそれ博麗の巫女とか普通の魔法使いに簡単に見破られてたよ
ね」

にとりの顔が少し曇る。

「ぐ……仕方ないじやんか！ 光学迷彩つてのはさ、纖細なものなんだから弾幕ごっこなんて過激な遊びには向かないの！」

「それは……盟友が拾おうとした新聞をパツと奪う、とか……」「にとりは目を逸らしながら言つ。

えなししゃない？」

「失礼な！ 他にも使い道はあるつてば……今思つてないだけで」

「……まあいいや。じゃあ原理を教えてくれる？」

盟友は少し赤面した顔をしながら言つた。

「もちろん。まず盟友はどうやって物が目に入つて映るかわかる？」

「えーっと……どうだけ？」

「光が物体に反射して、その反射した光が目に入るから、見えるんだよ」

「……そうだった気もする」

盟友は少しうまく思つて出でようとする。

「だから、その反射した光が相手の目に入らなかつたら、相手にはその物体は見えなくなる、この原理を光学迷彩は利用してゐるんだ」「なるほど」

「本当は光を完全にすり抜けさせることができれば最高なんだけど、ほぼ不可能に近いからさ、光を少しうまくしてずらしてずらして……つてのを繰り返してそれに近い状態を作り出すんだ」

説明するのが楽しくなつてきたのか、にとりの口調が速くなる。

「へえ……でも、どうやって？」

「私の能力……知つてる？」

「水を操る程度の能力でしょ？」

「当たり。その能力を使って小さな水のレンズをたくさん光学迷彩スースの表面に発生させるんだ。それがさつとき言つたように光を少しづつずらしていく、するとあら不思議！ 光はほとんどが反射せずに通り抜けて行つて、周りにはほとんど姿が見えなくなるつて算段さ！」

「なるほど。大体はわかつたよ。弱点は何かあるの？」

「弱点？ エーと、レンズは水だから、雨の日は雨と一緒に流れちゃうんだ」

「なるほど、雨の日は使えない、と」

盟友は二つの間にか説明を紙に書き留めていた。

「で、悪戯以外に何が使い道はないの?」

「とりはしばらく考える。」

「うーん、思い付かないなあ」

「あんまり過激なことはできそうにないしなあ、こいつそりどこかに忍び込む…とか?」

「忍び込む……………そうだ!」

「ん? 何かひらめいた?」

「紅魔館に行こう!」

「へ?」

「とりは突拍子もないことを言い出した。外では鶏は鳴き止み、かわりにすずめが平和そうに鳴いていた。」

「紅魔館に行こう!」

始まりはにとりの突拍子もない一言からだった。

「ごめんにとり、もう一度言つてくれるかい?」

「だから、紅魔館に行こうって言つたんだよ。盟友。うーん、忍び込むつて言つ方が正しいかな」

盟友の顔が青ざめる。

「どうして君はそんな危ないことを考えつくんかい? 普通に近づくだけでも危険だつて言つられてるのに!」

紅魔館に近づくと門番に捕まつて、館の主の吸血鬼に食べられてしまつと人里ではもつぱらの噂だつた。

「大丈夫、大丈夫。光学迷彩があるんだしさ」

そう言つてにとりは光学迷彩を持つてかざして見せる。

「本当に大丈夫なの?」

盟友がまだ不安そうに言つ。

「心配性だなあ盟友は。光学迷彩がしつかり効くのは盟友も確認済でしょ? さ、いこつ! まだ朝だし、吸血鬼だつて寝てるつて」「あつ、ちょっと!」

にとりは光学迷彩をリュックにしまつと、盟友の手を取つて外に出た。外はまだ静かで、鳥のさえずりだけが聞こえていた。

森を抜け、一人は紅魔館の近くにある霧の湖までやつて來た。今日はあまり霧は深くなく、湖に突き出した土地に建つ紅魔館がよく見える。

「さてと、そろそろ潜入の準備をしようか。はい盟友、一応もう着

といてね

にとりはリュックを降ろし、中から光学迷彩を取り出して、盟友に渡した。

「あれ、僕に渡しちゃつていいのかい？」

「いいのいいの。予備があるから」

彼女はそう言ってリュックからもう一つ光学迷彩を取り出し、上から羽織つて少し伸びをして彼に向き直る。

「んー、よし！ 準備完了！ 盟友、急ごうか。こんな格好してたら妖精たちが集まつてきて潜入どころじゃなくなっちゃうからね」確かに雨でもないのに合羽を着ている姿はいたさか滑稽だと彼は思つた。

「ほら、あそこが正門だよ」

草むらに隠れていりにとりが盟友に耳打ちする。

「……まさか正門から堂々と入る訳ないよね？ いくら光学迷彩があつても……」

「大丈夫。当然一番安全な場所から入るよ」

「ならいいんだけど……」

「お、門番だ」

彼女の言う通り、門の近くに肩まで届く赤い髪に緑色のチャイナドレスを身に纏つた、紅美鈴が立つていた。

「……噂だとよく居眠りしてるって聞いたんだけど、今日はばつちり起きてるね。ま、起きていうが無かるうが正面から入る気はさらさら無いんだけどね。盟友、他をあたる」

盟友は黙つて頷くと一人は音をたてないよう気をつけながら正門から離れた。

それから二人は紅魔館の側面に回つた。側面は正門付近とは異なり、手入れが行き届いていないのか水際近くまで雑草や木が生い茂

つているし、庭を囲む柵は所々穴が空いている。警備も木陰で妖精メイドがサボつて昼寝している程度だった。

「正面ほど警備は厳しくないみたいだね」

周りを見て盟友が呟く。

「まあ、侵入者は空から入つてくるしね」

「侵入者？」

「ああ、魔理沙のこと」

「ふーん……あ、にとりにとり！」

盟友が目を醒まして伸びをしている妖精メイドを指さす。

「オーケー、光学迷彩展開！」

にとりはそう言つて光学迷彩の表面に水のレンズを発生させる。するとレンズは光を全反射に近い角度で屈折させ、たちまち二人の姿は見えなくさせた。まだ眠そうな目で持ち場に戻るらしい妖精メイドは一人に気づくこともなく素通りしていく。

「よし！ うまく機能してるみたいだね。上出来上出来。それじゃあ、あの窓から中に入ろうか」

「……どの窓のこと？ 指さしてるんだらうけどわからないよ」

光学迷彩を展開しているので、盟友には指さしているのがどの窓かわからなかつた。

「あ、そうだつたね。ごめんごめん」

その声が聞こえたのとほぼ同時に、盟友の目の前にあつた窓ガラスが音をたてて割れる。盟友は気づかれたかと後ろを振り返るが、幸い妖精メイドはもう見えなくなつていた。

「これだよ、この窓。さあ、潜入するよ！」

「……もつと用心しようか」

盟友はにとりの無用心さに半ばあきれていた。

一人は延々と長い廊下を歩いている。廊下は薄暗く、等間隔に吊

るされたランプだけが周りを照らしている。床には赤い絨毯が敷かれ、壁紙もまた赤い。

光学迷彩は切つてある。さすがのにとりも常に展開していると疲れるようだ。

「しつかし長い廊下だね……悪趣味なくらい赤いし、飾り気もないし……お、でっかい扉。魔理沙が話してた図書館かな？」

それまでふつくさと文句を言つていたにとりの顔が明るくなる。

「じゃあ盟友、久しぶりに光学迷彩を展開するよ」

盟友は軽く頷く。にとりはそれを確認すると光学迷彩を展開させる。

「さーて、どんな本があるのかなあ！ わくわく

彼女は期待に胸を弾ませながら重い扉を開いた。木でできた扉が軋む音が広い図書館に響き渡る。

「誰？ ……レミイ？」

奥から声がした。

「やばつ！ 盟友、静かにね」

「……にとりこそ」

ナイトキャップのような帽子を被り、薄紫のローブを着たパチュリー・ノーレッジは羊皮紙の上を走らせていたペンを止めると、首を傾げた。

「……おかしいわね。氣のせいだつたかしら。……小悪魔、見てきて頂戴」

「はい、パチュリー様」

赤い髪に頭と背中に生えた羽、白い上着に黒いベストとロングスカートが特徴のパチュリーの使い魔である小悪魔は抱えていた本を机に置くと、入口の方へと向かつた。

「んー。おかしいですねえ……誰もいないです……」

小悪魔は扉の周りを見回すが、何処にも人影は見えない。

「盟友、まだ静かにね」

「わかつてゐよ」

侵入者の二人はぼそぼそと喋りながら入口近くの本棚の彼女が戻るのを待つてゐる。

「確かに物音はしたのになあ……んー」

小悪魔は頭を抱えながら戻つていった。

「ふう……どうやらまいたみたいただね、盟友」

にとりは光学迷彩を解除し、額の汗を拭うそぶりを見せる。

「別に見つかつたわけじゃないんだけどね……」

「まあね。それじゃあ盟友、せつかくこんなに広い図書館に来たんだし、めぼしい本でも探そつか

「ん、そうだね」

二人は本棚で入り組んだ図書館の奥で床にいくつか本を広げて、読みはじめた。

「うー、どれもわけわかんない魔法陣についての本ばかりだよ……つまんないなー。もつと機械についての本とか滑稽本とかあると思つたのに……盟友、何か面白い本はあつた?」

「そうだね……この今読んでる話は面白いよ」

彼は手に持つてゐるにとりの横に詰まつてゐる本とは違つた、和綴じの本を渡す。

「どんな話?」

にとりは渡された本をのページをぱらぱらとめぐりながら聞く。「とある猫の話だよ。その猫から見た人間が描かれているんだ。そこから出てくる人間がおかしくてね……それにけちをつけたりする猫もまた面白いんだ。それで、ああ、人間の行動は傍から見たらなかなかおかしなことをやつてるんだな、とか考えさせられるんだ」

「面白そうだね、その本。……いいなあ、盟友は気に入つた本が見つかつてさ。私は面白そつた本が見つからなかつたのに……」「こりは肩を落とす。

「まあまあ、そつ氣落ちしないで……」

「むー」

にとりが膨れつ面をしていると、部屋中にふいに鐘の音が鳴り響いた。

「あ、パチュリーをまパチュリーをま、お昼の鐘ですよ。お昼食べに行きましょう」

「……私はこれ書き上げてから行くから小悪魔は先に行つて……パチュリーはだるそうに答える。

「そんなこと言わずに、行きましょ」

「……いや、私は一回くらい食事しなくても死なないし……」

小悪魔の表情が厳しいものに変わる。

「ダメですよ！ そんなこと言つてほつといたりこの前一日中飲まず食わずに魔導書のまとめ作業やつて倒れたじゃないですか！ 今田は何がなんでも来てもらいますからね！」

小悪魔はそう言つてパチュリーを机から引きはがし、図書館の出口へと連れていつた。

「……むきゅー」

「……わつきのは昼の鐘かな？」

「多分そうだね……！ しつ！ 誰か来る」

にとりは急に動きを止めた。

「……だいたいパチュリーをまはずつと図書館に籠つてたら徽臭くなるとか考えないんですか？ それにあの時はお嬢様だつて心配して……」

「わかつた、わかつたから……」

パチュリーは煩わしそうに小悪魔に手を引かれて図書館を後にした。

「行つたみたいだね」

「うん、行つた」

本棚の陰から一人はその一部始終を見ていた。

「……苦労してんんだね、あの人」

盟友が氣の毒そうに言う。

「うんうん、ああいうお節介焼きな奴がいると困るよねえ」

「え、そつち！？」

「え、パチュリーのことじやないの！？」

二人は互いに驚いた顔をし

「……やっぱり人間つて変わってるなあ」

「……やっぱり河童つて変わってるなあ」

同時に言つた。

「む……まあそれは置いといて、これからどうするの？」

「……パチュリーの机を物色したら、帰ろうか」

「……いいの？ 勝手に漁つちゃって」

「ばれなきや大丈夫だつて。……それに紅魔館に不法侵入してゐるし

……さて、どんな珍しい物があるかなあ！」

にとりは再び目を輝かせながら図書館の奥へと進んでいった。

「ふーん、意外と“ちや”“ちや”してるんだね」

にとりは本が左右に積み上げられた机を見て言つ。

「羽ペンにインク……珍しいもので字を書くんだね」

盟友は羽ペンを手に取つて関心している。

「お、盟友盟友、顕微鏡だよ！ これは撮つておかなくつちやね」

にとりはリュックから小さなカメラを取り出し、顕微鏡を写真に

収めた。

「そのカメラはどうしたの？」

「『』の前カメラを修理した後、つくりを簡単にして作つてみたんだ。フィルムの交換ができないから使い捨てだけど、レンズを小さくしてしつかりピントを合わせなくてもきれいに撮れるよう『』でできたよ。名前をつけるとしたら……『撮れるんです』とかかなー」

にとりは顕微鏡を撮りながら得意げに話す。

「問題は四枚しか撮れないことだね……あ、一枚余つちゃつたけど、まあいいか。さて、やる『』とはやつたし、帰ろつか

「そうだね」

「さて、入口のホールまで来たわけだけど……もうこいつのこと光学迷彩の力を試すためにも正門から堂々と出よつか！」

盟友が驚愕のあまり固まる。

「男は度胸！ さあ、行くよー！」

にとりは彼の手を引いて外に出る。

外に出ると太陽はてっぺんまで昇つていた。

「はつ、『』は？」

盟友は我に帰る。

「正門だよ盟友。ちよづじ門も開いてて、門番もお風呂中だ。出るなら今のうちつてね！ それじゃ、お先にー」

「ち、ちよづとー！」

にとりは光学迷彩を展開して正門を抜けよつとする。だが突然座り込んで寝ていた美鈴が立ち上がり、

「この気……曲者ッー！」

「え？」

見えないはずのにとりを蹴り飛ばした。にとりはそのまま宙を舞い、紅魔館の時計台を越えると見えなくなつた。しばらくして、何

かが水に落ちる音が聞こえた。

「にと……あ」

盟友は自分の光学迷彩の効果が切れているのに気がつく。にとりが氣絶したためだろうか。盟友はさつと壙の陰に伏せて隠れる。

「……ハツ！ いけない私つたら、また寝ぼけて……もつ脛だし休憩しに行こうかな。妹様も暇してるだろうし」

美鈴は太陽を見て時間をぴたりと言い当てる。紅魔館の方へ歩いていった。

盟友は美鈴が見えなくなると、一目散に門から逃げ出した。

盟友が湖を見ると、にとりが水際に打ち上げられていた。彼は近づいて声をかける。

「にとり、にとり」

「う、ん、盟友？」

「大丈夫？ 思い切り蹴飛ばされてたけど」

「だ、大丈夫。うん。落ちたのが湖でよかつたよ。リュックの中身が潰れたら多分私泣いちゃってたよ。……つてもう日が暮れそうだね」

にとりが空を見上げると、空は夕焼けで真っ赤に染まっていた。「じゃあ、最後に一枚紅魔館をバックに撮つて、今日はお開きにしようか」

にとりが提案すると盟友は頷いた。

「あ、ちょっとそこの君いいかい？ 写真撮つてくれないかな？」

盟友は湖を飛んでいる妖精に声を掛ける。

「ほう、あたに声をかけるとは、知らない人間もお日が高いね。いいよ！」

声を掛けられた妖精、チルノは偉そうに言つ。

「ありがとう」

「えーと、このボタンを押せばいいの?」

「そうそう、よく知ってるね」

にとりが褒める。

「ふふん、天才に知らないことなどない!」

チルノは得意げに胸をはる。

「うん、すごいすごい。……じゃあ紅魔館と僕たちが入るように撮つてね」

「任しといて! ……はい、笑つて!」

カシャッというシャッター音が響く。

「よし! 完璧なのが撮れたよ! 天才でさいきょーのあたいが言うんだから間違いなし! それじゃ、あたいはいそがしいからじゃあね」

「ありがとう」

二人はチルノにお礼を言つて、湖を後にした。

「一時はどうなるかと思つたけど、なんとか帰れたね」

帰り道の途中、盟友が口を開く。

「そうだね……最後以外はハプニングなくやれたね」

「……でももう一度と行かないよ」

「あんまり収穫なかつたしね」

「そういう問題じゃなくてさ……」

「他に何かあるの? ……あ、そろそろ人里だよ。それじゃ盟友、またね!」

「うん、また今度ね」

二人は挨拶代わりのハイタッチをして別れた。

まだ日は暮れておらず、空は夕焼けで真っ赤に染まっている。あのカメラにもう一枚フィルムが残っていて、この夕焼け空を写真を撮れたらいいのに、と彼は思った。

彼が目を醒ますと、太陽はすでに中天まで昇っていた。

「……いけない、寝過ぎてしまった」

彼は身体を起こすと家から出で、新聞を取りに行く。が、昼近くになるともう新聞は何処にも落ちていなかつた。

「さすがに落ちてないか」

彼は新聞探しを諦め、家に戻つてかなり遅いが朝食を探ることにした。

「さて、今日は何をしようか」

「うーん、いたた。昨日のが今になつて効いてきたなあ」

にとりは昨日美鈴に蹴り飛ばされたときの痛みが今になつて効いてきたようで、朝起きてからずつと布団に寝転がつていた。

「今日はどうしようかな……朝ごはん食べてから考えよ」

彼女は布団に寝転がりながら枕元に置いておいた壺からきゅうりを取り出し、かじる。

「……ショッパ。漬けすぎたかな。失敗失敗。次は気をつけよ。さ、もう一本……あだだ」

彼女は全身に軽い痛みを感じながら壺に腕を伸ばし、さらにきゅうりを手に取る。

「さて、今日は何をしようかな……」

彼女はきゅうりをかじりながら考える。体が痛いからあまり外に出たくない。だがこうして家でだらけているのをあのお節介焼きな雛に見られたら面倒だ。

「にとりー、いるかしらー」

外で彼女を呼ぶ声がした。噂をすればなんとやらだ。

「いなーのー？ 入るわよー」

やめか、入つてくるな。そつことりが言つ前に離はドアを開けてことりと対面した。

「お、おはよう。離

布団に寝転がつたままにことりが挨拶する。

「あら、おはようにして。……まだ寝てるの？ だらしないわね」

緑の髪を小さなリボンで前で束ね、黒に近い濃い赤の上着に白いフリルが縁に付いた赤いスカート、そして頭のてっぺんに乗つた大きなこれまた赤いリボンが特徴の鍵山離が白い歯を輝かせながら笑顔で辛辣な一言を放つた。

「うぐ……しようがないじゃないか。昨日あの、その、足を滑らせて崖から転げ落ちちゃつて全身が痛いんだよ……」

「紅魔館に忍び込んだら門番に蹴り飛ばされた」などと言えるはずがなく、ことりはとつさに「まかした。

「あつ、そう！ ……まあ！ それは大変ね」

言動が一貫していない、今日は厄が足りないんだな、とことりは直感した。

「どうでもいいのか、心配してくれるのかはつきり……」

「どれどれ……」

「あがつ！ 痛い痛い痛い！」

離は加減せずに思い切りにことりの腰を押す。

「うーん、これは重症ね。医者じゃない私でもわかるわ

「はあつ ……はあつ」

痛みでことりの息は切れ切れで、田には涙が浮かんでいた。

「いのままじやしないでしょつから、薬草を採つてくるわ。それまでじつとしてるのよー」

そう告げて離は出ていった。部屋に静寂が戻る。

「桺……盟友でもいいや、誰か助けて……」

「……とはいつたものの、どれが薬草かわからないわ……」
雛はそれらしき草を見つけてもそれが薬草かはわからず途方に暮れていた。

「誰か薬草に詳しい方はいないかしら……」

雛はふわりと飛び上がり、くるくると回って辺りを見回す。

「んー、……いたいた！ もしもーし、そこの兎さーん」

「え？ 私ですか？」

彼女が声を掛けたのは、兎耳のついた淡い紫色の長い髪に紺色のブレザー、そして見た者を惑わせるような赤い瞳が特徴の鈴仙・優曇華院・イナバだった。

背中には大きな箱を背負っている。人里に薬を配りに行く途中だったようだ。

「そうよー。あなた、永遠亭の子でしょ？ 友達が体を痛めちゃつてね、薬になる草を探してるんだけど、どれが痛みに効くやつか教えてくれないかしら？」

「痛みに効く薬草、ですか？ それなら薬草を集めなくてもいいものがありますよ」

鈴仙は背負っていた箱を下ろすと、中から小さな容器を取り出した。

「それはなあに？」

「師匠の新薬ですよ。使いやすい患部に塗るタイプで筋肉痛、腰痛、関節痛、打撲によく効きますよ」

薬について説明が始まると、人懐っこかつた鈴仙の声がどこか事務的になる。

「へえ……」

「内容成分はインドメタシン10mg これは非ステロイド性の鎮痛消炎成分で、筋肉や関節の痛みをとってくれます。そしてメントールが30mg 患部にひんやりとした清涼感を与えて、痛みやか

ゆみをやわらげてくれます。あとは添加物としてミリスチン酸オクチルドデシル、アジピン酸ジイソプロピル、カルボキシビニルポリマー、ヒプロメロース、ステアリン酸ソルビタン、ステアリン酸グリセリンを配合して効果の持続力と速効性の向上を……」「あつ、そう！……よくわからないけどすごい薬なのはよくわかつたわ。ありがとう。一つ貰つてもいいかしら？」

「ええ、どうぞ……それでは私はこれで失礼します……せつかく覚えたのになあ……」

鈴仙は説明を唐突に切られ、肩を落として去つていぐ。

「あ、一つ言つておくわ

「何でしちゃうか……」

鈴仙はゆつくりと振り向く。

「薬の成分なんて普通の人にとってはどうでもいいから話をなくていいと思うわ。いろいろとありがと、じゃあね」

そう言い残すと雛はまたくるくると回りながら飛んでいった。山には「あんまりだあーー！」といつ鈴仙の叫び声が響いた。

彼は何の氣もなしにただ人里の大通りを歩いていた。毎時を過ぎて、またあちこちに活気が戻つてきている。

「兎のお嬢ちゃん今日は元気ないね。何かあったのかい？」

「いえ大丈夫です……はい。落ち込んでなんかいませんから……腰痛の薬でしたね、どうぞ」

「あ、ああ。ありがとう」

「うちの子が風邪引っちゃってね、風邪薬もらえる？」「はい……」

いつもと違つて元気の無い薬売りの兎を不思議に思いつつ、その近くに建つ本屋を見て、最近本屋に寄つていなことに彼は気づいた。今日はとくにやるべき事ないので、彼は久しぶりに本屋に入

ることにした。

「『めんぐださい』

彼は軽く挨拶をしながら暖簾をぐぐる。

「いらっしゃい。お、仙道の兄ちゃんじゃないか。久しぶりだね」店の奥にいた店主が笑顔で返す。

「……何度も言つてますが私は仙道じやないですし、そのための修行もしてませんよ」

彼は少し苦笑する。

「そうだつたつけ？ まあ細かい事は気になさんな。で、今日はどんな本を探してんんだい？」

「……特に探していいる本は無いですね。最近入つた本でおやじさんのおすすめはありますか？」

「せうだな……『突撃！ 命蓮寺！』はなかなか面白かったぞ」店主は平積みされた本を一冊手に取る。

「……どんな本ですか？」

「毎朝新聞ばらまいてく天狗がいるだろ？ その子が最近できた寺の住職さんと対談する本だよ。所々話が噛み合つてなくて笑えたよ」

「面白そうですね。買います」

「まいどあり、3000円な」

彼の財布に延ばした手が一瞬止まる。

「……高くないですか？」

「お布施込みの値段らしいけど、天狗の言つことだからな、どうだか」

店主は肩をすくめた。

天狗のただの口実かもと思いつつも、彼は買つことにした。

「また暇なときは寄つてくれよ」

「ええ、もちろん」

そんなやり取りを交わしながら彼は本屋を後にした。

空が赤くなり始めた頃、雛が薬を持つてことりの家に戻ってきた。

「ことりー、薬持ってきたわよー、入るわよー」

返事を待たずに雛は家のドアを開ける。

「……あら、寝てる。待ちくたびれちゃったのかしら。まつたく、仕方ないわね」

雛はにとりの腕と脚に薬を塗り、書き置きを書く。

「これでよし、と。しつかり寝るのよー」

雛はことりに小声で別れを告げ、家から出た。

「……さむっ」

雛が帰つてしまひくして、ことりは腕と脚の寒氣で目が覚めた。

「どうしてこんな手足だけ寒い……痛くも無い……あ、書き置きだ。

雛のかな」

書き置きには薬を塗つておいたから安心してよべ寝るよー」と書いてあつた。

「雛……ありがと。お節介焼きだとか思つてて」「めんね」「

ことりは書き置きを読み終えると、今度お礼しなくちゃな、と思ひながら外に出た。雛が塗つてくれた薬のおかげか夜風がいつもより冷たく、心地よく感じられた。

河童と厄神様（後書き）

後書きを書くのは初めてですね。
さかまたです。

今回は初めて盟友以外のにとりと関係のあるキャラとして雛を出し
ました。

雛はなかなかキャラ付けが難しかつたです。世話好き、というのは
決まっていたのですが……今回は天然が入つたようなキャラになつ
ていました。

雛は好きなキャラの一人ですので、これからもたまに出せたらいい
な、と思っています。

番外編・月の兎と月の頭脳（前書き）

今日は番外編です。
にとりたちは出てきません。

迷いの竹林を鈴仙・優曇華院・イナバはとぼとぼと歩く。落ち込んでいるのか、いつもはびんと立つている耳は力無く垂れていた。

「あ、鈴仙おかえりー。今日は夕飯いらないからよろしくー」

彼女が永遠亭の門をくぐると他の兎たちと話していた因幡てるが声をかける。

「ただいま……」

鈴仙は力無く挨拶を返すとそのままつてしまつた。

「元気ないなあ、鈴仙。師匠に怒られるようなことでもやつちやつたのかね。やれやれ、最近の若いのはすぐ落ち込むんだから……」

てるは小馬鹿にした口調で首をすくめる。

「うさつー！」

てるの肩をてるとは色違ひの黒のワンピースを着た兎がぽんぽん、と叩く。

「ああ、『めん』めん。じゃあ話を続けようか

「うさうさつー！」

他の兎たちがてるを囲むように座る。

「それから私は鰐に皮を剥がされてしまつてね、痛い痛いと泣き叫んでいたところをある人が助けてくれたんだ……」

てるは老人のよう木の枝を杖代わりにして再び話し始めた。一言言ひ終えて振り返ると、既に鈴仙の姿はなかつた。（何があつたか知らないけど、氣負いすぎちゃ駄目だよ……）

「あらウドンゲ、お帰りなさい。今日は遅かったわね、私が夕飯作ることになつちゃつたじやない。まあ、こうじうのもたまには悪くないんだけど……あら、こつになく落ち込んじゃつて、何かあつた

の？」

腰に届く程長い銀色の髪を三つ編みに束ね、割烹着を着た八意永琳が振り向きながらきく。

「師匠お～聞いてくださいよお～」

鈴仙が永琳に飛びつく。

「あらあら、どうしたの？」

「実は……」

茶の間に移つた鈴仙は永琳に今日のいきさつを話した。

「ふーん、厄神様もなかなかきついことを言つたのね……」

「ですよねえ～！ 私すつごく勉強したのに……」

涙をぽろぽろと流しながら話す鈴仙。それを永琳はお茶を啜りながら落ち着いて聞いている。

「ふつふつふ、騒がしいと思つたらまた鈴仙が人生相談してゐた
いね。さて、今日はどんな永琳節が炸裂するのかしら……」

そして隣の部屋で笑いをこらえながら聞き耳をたててている人影が
一つ。艶やかに光る黒い髪に鮮やかな装飾の入つた着物を身に纏つ
た、蓬萊山輝夜だ。

「でも厄神様の言つことも一理あるわ

「ええつ！？ ジャあ今までの私の頑張りは……」

（おつ、珍しく否定から入つた）

「だつて自分の興味のない話を延々とされるのは聞いている側から
見れば苦痛でしかないわ。ウドンゲ、もし姫様が魚の小骨の上手な
取り方と刺さつたときの対処法について一時間語り続けたら嫌でし
ょう？」

「はい……」

（私を例えに出すな！ 鈴仙も即答するなー）

「じゃあ私の話もその類に入っているんですね……」

鈴仙は悲しそうな顔で視線を落とす。

「そうよ。でもね……」

永琳は額に手を当て、深くため息をついた。（あれは永琳節の始まりのポーズ！）輝夜は襖に更に耳を近づける。

「あなたが人里で相手をするのは一人じゃないでしょ？」薬を貰いに来る人の中には医者の卵がいるかもしれないし、そういう小難しい話が好き、っていう物好きな人もいるかもしれないし、果てにはあなたがけなげに説明する姿を見るためだけに訪れている人もいるかもしない……」

（山彦は妖怪の仕業、って話くらいありえないわ……）輝夜もあきれたように額に手を当てる。

「そういう人に薬の成分を聞かれたときに答えられなかつたら、周りの人たちの信用を失いかねないわ……『作った人にもよくわからぬ薬を私たちは使つていたのか……』ってね。一度と来るなど人々に石を投げられるだけならまだしも、最悪の場合そのまま廃業に追い込まれてしまうのよ！」

「そ、そんな……」

（な、なんだつてー！……って、ないない、いくらなんでもそれはない）輝夜は首を横に振る。

「そんなことにならないためにも、薬の勉強は欠かしちゃいけないのよ。わかつた？」

「はい！ 師匠！ わざわざ相談に乗つてください、ありがとうございました！」

（……今日も綺麗に丸め込んだわね。丸め込まれる鈴仙も鈴仙だけど。……もしかして永琳、医者より講談師の方が向いてるんじゃないかしら）

「話しこんでしまつたわね。ウドング、料理を並べておいて。私は姫様を呼んでくるから」

「わかりました」

（やばつ、部屋に戻らないと）輝夜は足音を立てないようここつそりと、しかし素早く部屋に戻つた。

「カグヤ、夕飯の用意ができたわよ」

部屋に入ってきた永琳が言う。彼女は昔からの約束で一人だけのときは名前で呼んでいる。

「んー？ ああ、あいわかった」

輝夜はだるそうにゆっくりと立ち上がり、永琳に手を引かれて部屋を出た。夜風が心地よい。

「今日は私が夕飯を作ったの。久しぶりだつたから張り切っちゃつたわ」

「永琳が張り切るなんて、期待しちゃうじゃない（……鈴仙もう少し落ち込んでていいぞー）」

「何か言つたかしら？」

「ううん、なんにもー」

輝夜は目を合わせないようこじて答えた。

番外編・月の兎と月の頭脳（後書き）

今回は落ち込む鈴仙を極論で無理矢理元気付ける永琳、といつネタが浮かび、ちょいと前回鈴仙が登場したので書いてみました。さかまたです。

わりと思い付いたままにやりました。稀なケースですね。どうも私が永遠亭の話を書くとキャラがペラペラ喋る話になる気がします。初めて書いたSSにしか出してませんが……永遠亭組は好きですのでいつかまた主役のSSを書きたいなー、と思つたり。

永琳が深刻そうに言えぱどんなに嘘くさい話でも鈴仙は口口ッと騙されそうです。すぐばらしますが。

永琳「実は蓬萊の薬はね……ただの風邪薬なの」
鈴仙「な、なんだつてー」
永琳「嘘よ」

「こんな感じに。

夏、妖怪の山に小川のせせらぎと蝉の鳴き声がこだまする。一方は涼しさを、もう一方は夏の到来と蒸し暑さを人々に感じさせる。

「ふんふ~ん」

朝からにとりは鼻唄まじりに川辺で機械をいじっている。部屋でやっていると蒸し暑くなるから、とのことだ。

服装はいつもの水色の作業着のような服ではなく、水色のハーフパンツに黒のタンクトップ、服装だけ見れば少年のようにも見えた。

「あとはカバーをはめて……よし、完成！」

にとりはプロペラが入った四角い箱を持ち上げる。

「さあ、早速動くか実験だ！」

そう言つてにとりは発明品を抱え、意氣揚々と自分の家に戻つていった。

「ただいま……うげ」

ドアを開けた彼女を待つっていたのはむせ返るような熱氣だった。

薄着だとこうのに汗がとめどなく流れる。

「あつつ……どうして窓閉めたんだろ。こうなるのはわかりきつてたでしょ……もー、私のバカ」

まあ、この扇風機すぐに涼しくなるぞ、と彼女は気持ちを切り替えて中身がぎつしりと詰まった道具箱から蓄電池を取り出し、扇風機を繋ぎ、扇風機のスイッチを入れる。電気の力でモーターが作動し、プロペラによつて涼しく、心地よい、暑い夏を吹き飛ばす風が発生する……

「おー、涼しく……ない……」

「ようなことはなく、プロペラは田に見えるせじゅくつと数回転すると止まってしまった。

「えー、なんでかな……、まさか

「にとりははつと蓄電池のメーターを見る。メーターは残量ゼロを表すEの部分を示していた。

「なんだ、バッテリーが切れてただけかあ……根本的な問題じゃないか、使つたら充電は徹底しないとなあ……こんな暑いのに充電するの、やだなあ……」

彼女は不満を漏らしながら部屋の隅に鎮座する自転車に跨がつた。この自転車はもともと香霖堂に置かれていたものだつたが、舗装などされていないため路面が悪く、ほとんどの妖怪は急ぐときは空を飛ぶので自転車など幻想郷では無用の長物である。店主の森近霖之助もたいして気に入ることもなく、前述の理由で売れもせず、香霖堂の隅で埃を被るだけの存在になつていた。そうして持て余していたところをにとりは譲つてもらひ、今はこつして発電器として使つていて。

「うおおおおおおお！」

「にとりは一心不乱に自転車をこぐ。外を走れば空を飛ぶ靈夢じぎりきり追い付くことができるかもしない程度の速さだ。

十数分こいだだらうか。自転車に付けられたベルが鳴る。充電完了の合図だ。

「お、終わつたあ……」

「にとりはペダルから足を離す。だがペダルはそのまま回つづけ、にとりのくねぶしをしたたかに打つ。

「あつ、つつ……」

安堵の表情から一転、声にならない叫びをあげ、苦痛の表情を見せたにとりは自転車から転げ落ちた。しばらくそのままうずくまつた後、にとりはそのまま這つて扇風機の前に向かう。窓を開け、換

気した方がどう考へても早いが、そんな選択肢は彼女にはなかつた。彼女を今動かしているのは好奇心と、扇風機の生み出す涼しさへの期待感だった。

「ぐ、へへ……」「…

部屋中をはしづり回り、ようやく扇風機の前に辿り着いたにとりは、待つてましたと言わんばかりに扇風機の電源を入れ、風の強さを一番強い「台風」に入れた。

「わあお……」

虚ろだつた彼女の目に光が戻つていぐ。体からはいまだに風で乾かしきれないほどの量の汗が流れ出し、床に人型の染みを作る。

「……しあわせー」

「」のしあわせはみんなにも分け合わなければ、と彼女は思い、しばらく涼んだ後早速一個目の扇風機を作ることにした。

毎時を過ぎた頃、家に訪問者がやつてきた。

「にとりー、入るよ……つわ」

彼が家に入ると、むせ返るような熱気が肌にまとわり付いた。床には大きななめぐじが這つたかのようにぬめつた黒い跡が残つている。おそらくにとりの汗だらう、と彼は思った。

「おお、その声は盟友だね……よく来たね。ちょうどよかつた、今この恐ろしく暑い、灼熱地獄のような夏を乗り切る道具ができたんだ」

「」にとりは扇風機の風で元気を取り戻したとはい、まだしんどいようだ。二人は挨拶代わりに手を合わせる。彼女の手は汗でぐつしょりと濡れていた。

「おおう……それより窓締め切つて家の中すこく暑いけど、にと

りは平気なのかい？」

盟友は家の窓を開けながらきく。熱気の籠つた家の中に外の比較的涼しい風が入ってくる。

「へいき、へいき。……」の扇風機があれば、ね

にとりは轟音を響かせながら風を送る、四角い箱を指さした。

「扇風機？涼しそうだけど、ずいぶんとやかましい機械だね」

「ああ、それは安心しておくれ、盟友。使つてのモーターがこれだけは無駄に強いやつになつてゐるからさ。普通のモーターにしつけばそんなにやかましくはないはずだよ」

「そうかね？」

「構造は簡単だから結構楽に作れるんだ。とりあえずもう一個できてるから、盟友にあげるよ。あと、電源用に道具箱から適当なバッテリーを持つていてね」

「本当かい？ありがとう。早速今夜使つてみるよ

今夜も暑いだろしね、と付け加えると、盟友はにこりと笑つた。

「いやあ、喜んでもらえたみたいでよかつたよ。さて、私は今から他の友達に渡す分の扇風機を作るつもりなんだけど、手伝ってくれるかい？」盟友

「そうだね……まあ、こゝまで来たんだし、手伝わせてもらおうかな」

少し腕を組み考へた後、盟友は頷く。

「ほんと？悪いねえ、それじゃあ早速だけどそこの工具箱からレンチ持つてきて」

にとりは作業を再開し、空いた片手で隣に置かれた箱を指さす。

「はいはい

「それから接着剤とフェムトファイバー、あとジャンク箱から単相誘導モーターを、それに……」

遠慮なくこき使おうとすることりを見て、長い一日になりそうだ、と彼は思った。

長い手伝いが終わり、彼はよつやく家に帰ってきた。田は既に沈んでいる。

「……まだ暑いな。早速使ってみようかな」

彼は扇風機を立て、発電器を回す。数分間回し続けて、疲れきったところで扇風機のスイッチを入れる。

「おお……」

プロペラが回り始め、春のそよ風のような心地よい風が流れる。「家にいながら涼しい風を感じられる機械……いい夏の風物詩になるかも」

彼は呟いた。

日がすっかり沈んだ頃、にとりの家に再び訪問者がやつてきた。鍵山雛だ。

「こんばんは、にとり。今日も暑かつたわね。元気だつたかしら?」
彼女は片足を引き、スカートを軽く持ち上げてにとりにお辞儀をした。

「こんばんは、雛。おつそろしく暑かつたけど、元気だよ。あ、昨日は……その、いろいろとありがとね」

「にとりは挨拶を交わし、照れ臭そうに礼を言った。

「あら、友達なんだからお礼なんていいのに。でも、ありがと。うて言われるのはやつぱり気分いいわね……どういたしまして」「でさ、お礼と言つちゃなんだけど、私が作った（盟友も手伝ってくれた）発明品をあげるよ」
にとりは扇風機を指さす。

「不思議な箱ねえ……」

「扇風機って言うんだよ。天狗様みたいに風を起^レせるんだ」

「へえ、風を起こす機械ね……」

雛は不思議そうに扇風機を眺めている。

「使い方はね、すつ^レぐ簡単なんだよー。ま^レす^レの手回し発電器で電気を作つて、そのあとは扇風機の電源を入れるだけ。ね、簡単でしょ？ 原理はね……」

「……私は機械に詳しくないし、話を聞いてもよく理解できないと思つから原理までは説明はしなくていいわ。『めんね』

雛は申し訳なさそうに、だがきつぱりと言つた。

「そう……まあ、いいやー。雛、早速使ってみてよ。充電は済んでるからスイッチ押すだけでいいよ」

にとりは少し落ち込みながらも手に持てる程小さな扇風機を雛に渡し、雛は言われた通り、スイッチを押す。すると、心地よいそよ風が流れだした。

「まあ素敵……」

「でしょでしょ？」

雛のほほこりんだ顔を見てにとりも嬉しそうに笑う。

「そうだ！ こんなふうにも遊べるんだよ。……あ、ー」

にとりが扇風機に向けて声を出すると、声がしゃがれて聞こえた。

「ね？ 面白いでしょ？」

「ふふ、あなたは本当に楽しことを考^{スル}くわね」

「えつへん！」

雛にほめられ、今度は血團^{クモ}に胸を張るにとり。傍から見ると親子のようにも見えた。

「ねえ、にとり

「なあに？」

「雛」

「これを使って、お空を飛べないかしら？」

「それは……さすがに無理だよ」

「あらあら
雛はおどけたように笑つた。

扇風機（後書き）

今年の夏は節電で扇風機が大活躍してますね。
さかまたです。

河童の科学力はどこかが異常に高くて、しわ寄せでどこかが極端に
低いイメージがあります。ロマンがないから研究しない、という分
野もありそうですね。

河童と白狼天狗

窓から朝日が差し込む部屋に、じゅうじゅうと駒を転がす音の後、ぱちん、という音が響いた。

「……王手、これで詰みだね……私の勝ち……」

にとりは伸びとも取れるほどゆっくりと両腕を空に突き上げる。田の下には薄く黒い隈が浮かんでいる。

「あー、連敗かあ……」

修験者のような装束に身を包んだ犬走桺は逆にがっくりと肩と耳を落とし、うなだれた。

「さて、次は何して遊ぼうか。本将棋は飽きたし、回り将棋でもしようか？ それとも挟み将棋？ あ、崩し将棋もいいね……」

「……少し将棋から離れようか」

桺は眠い目をこすりつつ、将棋はもつもつとざりだ、といつのような表情で言った。さすがに『天狗一の将棋狂い』とまで言われる桺も、夜通し将棋三昧というのは堪えたらし。

「そう？ ジャあ、運動でもする？」

にとりは部屋の隅に鎮座する発電用の自転車を指さす。

「いや、それ遊びじゃないし……それに久しぶりの非番の日なのに、そんな労働まがいのことしたくないよ」

桺は肩を軽く回しながら言う。

「えー、充電完了までの時間を競うのとか楽しい……んだよ？」

「嘘つけ」

「あ、ばれた？ 『ごめんごめん』

「ほんと、にとりは嘘が下手だね」

にとりのつく嘘はすぐにばれる。嘘をついたときにはきなり田をそらしたり、手がせわしなく動いてしまうからだ。

まあ、屈託のない笑顔でさらりと嘘をつくあの人に比べたらわりやすいことはいいことなのだが、と桺は思った。

「は、ハハハ。……お酒飲む？」

「ひとりは氷水がなみなみと入った箱から一升瓶を取り出した。

「はぐらかさないの。それにこんな朝から酒飲むとか、鬼じやあるまいし……まあ、休みだしこいつか」

桜ははにかみながら差し出された猪口を手に取る。

「そりやう、ずっと仕事づくりやあ息も詰まるでしょ？　たまには息抜きも必要だつて。わわ」

「ひとりが猪口に酒を注ぐ。

「うーん、趣味で生計立ててゐるひとりが言つとなんだかなあ……」「えー」

「はは、何はともあれ、乾杯」

「うん、乾杯」

一人は猪口をかちやん、と音をたてて呑わせると、一気に中身を飲み干した。

「うん、美味しい。どんちやん騒ぎの宴会もいいけど、親友と静かに飲むのもいいもんだね」

桜が言つ。

「だね。……そうだ！　つまみにきゅうりの漬物はどうだい？」

「ひとりはうんうん、と領きながらと壺からきゅうりを取り出し、桜に渡す。

「ひとりはきゅうりが好きだね。じゃ、頂こつかな。……辛つー！」

「あ、やつぱり？」

「やつぱりって……」

「しかしこんな朝から飲んでると、文さんが『宴会と聞いて飛んできました』とか言つてやつて来そだね」

「えー？」

桜は急に立ち上ると窓から身を乗り出し、辺りを見回した。外は蒸すよに暑く、じいじいと蝉が鳴くだけだ。

「……よかつた、あの人はいない」

「ひとりは文の話を始めた途端いきなり慌てだした桜を少し不審に

思つた。

「……せつにえれば梶

「何かな？」 とつ

「梶は文さんのこと、どう思つてゐるの？」

天狗の社会は完全なタテ社会だ。部下が上司を立てるのは当然とされている。

「えー？ ……いつも明るくて、人当たりもいいし、いい人だと思うよ」

「本音は？」

そのため上司の悪口など素面なら口が裂けても言えない。だが酒の席で、しかも一人しかいない状況なら何か聞き出せるかも、といふことでにとりは深く踏み込んだ。

「ちょっとめんどくさい人……仕事中に気にせず話し掛けてくるのはやめてほしいなー、とか」

「あー、うん」

ビンゴ。

「この前忙しいから話しかけないでくださいー、って怒つたら次の日の新聞に誇張されて書かれてたし……」

梶は猪口を傾け、空にする。

「あー、あれね……」

あの日の大見出しが『低下する下つ端天狗のモラル!』だった。彼女には悪いと感じながらも、あの時は腹を抱えて笑つてしまつたことをにとりは思い出した。

「あれ大天狗様が真に受けちゃつてさ、あの後にひびく叱られちやつたんだよ。『上司に手を出すとは何事だ』ってさ……ああもつ」

梶は、目に浮かんだ涙を拭い、猪口を傾ける。

「……悪いね。なんか湿つぽい話になつちゃつて」

「いや、私は平氣……だよ？」 うん

嘘。こうした話は聞いていると自分もつらくなるのでことつは苦手だった。

「もう？ ジャあもう少し私の話を聞いてくれるね？」

「ありや……うん」

わかりやすいと言つていた嘘を見抜けなかつた、これはかなり酔つてゐるな、とこどりは思つた。

「……もう職権濫用とかそういう次元じゃないんだつて！」

「うん……うん」

桜の愚痴が始まつて一時間程経つた。床には空の瓶が數本転がつてゐる。にどりはもう勘弁してくれ、という表情をしているが桜は気づかない。

「……上司の前とか取材のときだけいい子ぶっちゃつてさあ…」

ふいに騒がしかつた蝉の鳴き声が止み、部屋にさつと涼しい風が吹き抜けた。

「もつと部下にも優しくしてくださこみ、女さんの馬鹿あー。」

「もみじー？」

誰かが彼女の肩をたたく。

「誰ですか！ 今いいところ」

振り向いた彼女の前には短く切られた黒い髪に小さな帽子を被り、

首からカメラを提げた射命丸文がとてもいい笑顔で立つていた。

「あ、あああ文さん！？」

急に桜の顔が青ざめる。いきなり極楽から地獄に真っ逆さま、といつたところだらうか。

「ふふふ……見つけましたよ桜。朝からこんなに飲んで……田代の鬱憤は晴れましたか？」

「め、めめめ滅相もありません！ お、お許しを……」

桜は床に頭をこすりつける。もし床が熱い鉄板だつたとしても謝り続けるだらう、とこくらい勢によく。さすがに見ていられない

「で」にとつは目をそらした。

「あやや？ 私に何か謝ることがありましたか？ …… それは置い
といて、今からなんでも喰うとかいう死体を取材しに行くのですが
…… 休みのところ申し訳ありませんが、桺も来て頂けますか？」

「よ、喜んで」一緒にさせていただきます！」

桺はふらふらと立ち上がり、文に最敬礼した。

「心意氣は買いますが…… ずいぶんと酔っ払っているようですが、
大丈夫なのですか？」

「大丈夫です！ 足手まといにはなりませんから！」

「そうですか。では桺、行きましょうか。お仕置きはその後ですよ」

「ひつ……」

「それとこれとは別ですからね。…… あ、にとつさん」

窓に足を掛けたところで文がにとり振り向く。

「な、なんでしちゃうか」

にとりもついかしこまつてしまつた。

「部下がご迷惑をおかけしました」

文は事務的に軽く頭を下げる。

「いえいえ」

「これからも仲良くしてあげてくださいね？」

「も、もちろんです！」

事務的な表情から一変して満面の笑みを浮かべたのにとつは少
し驚いてしまつた。天狗とはこつも変わるものなのだろうか。

「では私たちはこれで」

「あ！ ……」

窓の桺を蹴つて一人は飛び立つた。玄関から出てほしかつたが、
それを口にする暇もなかつた。

「行つてしまつた……」

「にとりは散乱した瓶を拾い集める。

「さて、雛か盟友でも呼んで飲みなおそつかな。あ、雛呼ぶと『昼から酒つてどうなかしら?』って言われるな……じゃあ呼ぶとしたら盟友だな。じゃ、準備するかな」

彼女はいつも酒を入れている箱を開ける。

「……な、ない……」

箱には氷水が入つてゐるだけで、酒瓶は一本もなかつた。にとりはがつくりと肩を落とした。

河童と白狼天狗（後書き）

暦の上ではもう秋らしいですね。
さかまたです。

文はなにかと絡んでくるちょっと齶陶しい上司というイメージなんですが、書いてみるとイメージからズレてしまつた感が……

「……よしよ、よしよ」

一人で暮らすにも窮屈になつてしまつほど機械や発明品が並べられた部屋で、にとりはリュックサックに大量の荷物を詰め込んだ。

「んー、まあこれくらいでいいかなー」

発明品やら何やらで荷物でぱんぱんに膨れ上がつたリュックを背負うと、にとりはドアを開ける。

「いってきま……ぐえ」

意気揚々と出発しようとしたにとりであつたが、リュックが大きすぎてドアに引っ掛けかり、負い紐が首にかかる。

「荷物を詰め込みすぎてドアから出られない? ならば」

にとりは部屋に戻つて窓を開け、外に出る。

「窓から出ればいいだけのこと……今度はいつもならないよつて帰つたらドアおつきよしよ」

大きく膨れ上がつたリュックを背負つて窓から出でくる様は、泥棒にしか見えなかつた。

「あらにとり、おはよ。窓から出でくるなんて泥棒!」¹ でもしてるのかしら?」

空から聞き慣れた声が響く。山一番のお節介焼き(にとり談)の鍵山離だ。彼女はくるくると回りながらにとりの前に着地する。

「あ、離。おはよ。今日はね、桜が誘つてくれたから地獄の温泉に行つて来るんだ」

「あつ、そう! ……お土産期待しても良いのかしら?」

白い歯を輝かせながら、厄不足そうな笑顔で離は言つた。

「んー、何が欲しい?」

最近は毎朝彼女はこの調子なので、特に言及せずににとりは続ける。

「なんでもいいわよー。……おいしいお酒をよろしく

「うん、わかつた。お土産、期待しててね！じゃあねー」

「期待しないで待ってるわよー」

離は穏やかな笑顔で走つていぐにとりを見送つた。空は綺麗に晴れ渡り、山には秋らしい霧囲気が漂つていた。

地底につながる大穴の前で、犬走樺は親友を待ち続けてかれこれ三十分ちかく経つている。

「遅いなあ、にとり……」

河童はお氣楽で、マイペースな種族だ。約束の時間に遅れてやつてくることなどしそうちゅうである。河童どつしの待ち合わせならどちらも遅れてくるので問題はないが、河童を待つ側にとつてはたまつたものではない。

「樺ー、おまたせー」

「遅いよもつ……」

樺があきれながら言つ。

「あー、ごめんごめん。……しかし休みをくれるなんて文さん優しいね」

「うん、取材に付き合つてくれたお礼に休みを増やすように大天狗様に掛け合つてくれたんだ。……優しいのか厳しいのかやつぱりよくわかんない人だよ。いい人なのはわかつてんんだけどね」

樺はやれやれ、といった表情で肩をすくめた。

「さて、それじゃあ飛び込む前に……やつほー！」

にとりは深さを調べるために大穴に向かつて叫んでみた。大穴から声が返つてこなかつたところをみると、かなりの深さのようだ。（代わりに少し遅れて山のほうから「ヤツホー」という声が返つてきた）

「……うん、この深さなら落下傘を持ってきたかいがあつたつてもんよー」

にとりは大きなリュックサックから小さめのリュックサックを取り出す。

「落下傘？ それはなんだい？」にとり

「桺は不思議そうに言う。

「これは人間が高いところから降りるときに勢いを殺して安全に降りるための道具だよ。開き方はね、このヒモを……」

「ああ、説明はしなくていいよ。早く行こう、ね？」

「むむむ……わかつたよ」

にとりは話の骨を折られたため、少し不満そうに答える。

「準備はいい？」

「もちろん。……せーのっ！」

二人は同時に穴に飛び込んだ。

桺はそのままの勢いで、にとりは落下傘を開いてゆっくりと地底に降りていった。

深い深い地の底は、ここまで陽の光が届くためか、はたまたところどころに淡く光るキノコが生えているためか、彼女たちが想像していたよりも明るい。

桺は勢いよく、にとりは風に揺られてゆっくりと地底に足を着けた。

「にとり、別にそれいらなかつたんじやないの？ 私はそのまま落ちても平気だつたしわ」

「……ちっちっち、わかつてないなあ桺は。こうこう無駄や面倒があるからこそ一生は面白いんじやないか。もつと桺も私のようにゆつたりとした、何にも動じない心を持たなきや……」

にとりは落下傘を畳みながら苦し紛れに言う。

「おや、地底に遊びに来たのかい？」

背後から聞こえた声に二人が振り向くと、そこには八つのボタンのついたゆつたりとしたスカートを着、金色の髪を後ろで纏め、それを茶色のリボンで留めた黒谷ヤマメが立っていた。

「げえつ！ 土蜘蛛！」

にとりが条件反射的に叫ぶ。

「なんだい、会つて早々にその言い草は

「桜、先に行つて。私はこいつをさきたんにじてやつてから行くから」

にとりはヤマメの不平をえざり、いつになく鋭い目つきで言う。土蜘蛛は毒を操る能力を持ち、水を汚すということで河童から恐れられていた。土蜘蛛は多くが地底に住んでるのでそのようなことは杞憂だったのだが、土蜘蛛は毒で水を汚す、という話が一人歩きしてしまったため、河童の中には土蜘蛛を毛嫌いするものも少なはない。にとりもそのうちの一人だ。

「……すいませんね、なんか巻き込んでしまって」

「いいんだよ、何はともあれ地底によつこいや。地獄は賑やかで良いところだよ。地獄がくつぶべ、つてのもなんかおかしい感じもするがね」

桜はヤマメに深く頭を下げるが、ヤマメは快活そうに笑った。桜は彼女がにとりに對して怒つていなことにして少しほつとした。

「じゃあ、先に行つてるからね。気が済むまでやられたらにとりも追いついてきてね」

「はいはーい……つて、なんで負けること前提なのさーー！」

「さて、氣を取り直して……」ひで会つたが五年目、覚悟してもらつよー！」

にとりはヤマメを指さして叫ぶ。

「やれやれ、今日はそんな氣分じやないんだけどねえ……」

戦つ氣満々のことつとは反対にヤマメはあまり乗つ氣ではないよ
うだ。

「問答無用ー ござり、勝負ー！」

「はーはー、勝負勝負。……ちよつと桶借りるよ、キスメーー。
ヤマメが叫ぶと、空からにとりの頭めがけて子供が一人入れるほ
どの大きさの桶が降つてきた。

「あぶなつー！」

にとりがとつさに尻餅をつきながら避ける。

「おー、あれを避けるとはあんたなかなかやるねえ」

ヤマメは小さこ子供をほめるように言つ。

「でも、それだけじゃあねえ。はー、確保

そのままヤマメは糸で尻餅をついた体勢のにとりを絡めとる。大
言社語を吐いたにとりの戦いは、あっけなく終わった。

「はなせーー！ 外道ーー！」

「まあまあ落ち着きなつて。あ、暴れても無駄だよ。あたしの糸は
鋼鉄よりも硬いんだからね」

「はなせーー！ ……え？ なにそれすぐこーー！ どうこつこじとー？」

さつきまでの恨みがましこ田つきから一転、好奇の田でにとりは

ヤマメを見る。

「ん？ あんたそんなことに興味があるのかい？」

ヤマメは不思議な生き物を見るような田でにとりを見る。

「もちろんー こんな細い糸なのに、鉄よりも硬いなんて氣になら
ないほうがおかしいでしょ？」

「噂には聞いてたが……河童ってのは変わってるねえ

ヤマメはぼそつ、とつぶやく。

「やうじえば、どうやつたらこの糸はぼじかの？」

ヤマメは少し考える。あまり悪い奴ではなさそだが、

「あたしを含めこれからは土蜘蛛に喧嘩を売らないって言つなら教えてあげてもいいかな

「もちろんです。」

「

考えるまでもなく、こどりは即答した。ヤマメは少しうつむかえてしまつほど早さだつた。

「な、ならばよし。教えてあげよう。『うづぶんだ』『いら、罪人ども。』この蜘蛛の糸はおれのものだ。お前たちは一体誰にきて、のぼつて来た。下つる。下つる。『うづぶんだ』

こどりはその言葉を復唱する。すると、不思議なことこくべら暴れても切れなかつた蜘蛛の糸はぶつひとつ音をたてて切れてしまった。

「おお！ なんで？」

こどりは田を白黒させる。

「使つてるあたしにもよくわかんないんだよ。昔からの言ふ伝えなんだ」

ヤマメは肩をすくめる。

「へー、土蜘蛛って面白いね」

「なあに、嫌いな奴にまで『うづぶん』して訊けるあんたの方がよっぽどおかしい……もとい面白いぞ。」

こどりが笑うと、つられてヤマメも笑つ。

「そうだ！ この糸もらつひきつていいくにかな？ 何かに使えるかもしれないし、研究したいから」

「構わないよ、へるもんじゃないし」

「本当？ ヤマメさんありがとう！」

こどりは笑顔で頭を下げる。

「おいおいヤマメさんほんとおくれよ。ヤマメでいいんだよ」

ヤマメは溜れくそそくに頭をかく。

「……ほ、ほりー。友達を待たせてんだうつー。早く行つてやりな

ヤマメは早く行けとこどりの背中を押す。

「あ、そうだった。じゃあね、ヤマメさん！」

「

だから呼び捨てでいいって、とヤマメが言いかけたときには「」
りはもう走り去った後だつた。

「やれやれ、旧都の鬼どもが一番だと思つてたけど、地上にも騒が
しいやつがいるもんだねえ……」

ヤマメはぽつかりと空いた穴を見上げる。その先には米粒ほどの
大きさの青空が映つた。

旧都の旅館の一室にどどか嬉しそうな表情を浮かべて、にとりが
入つてくる。

「ずいぶん遅かつたね、にとり。あの人には勝てた?」

「いや、すぐにやられちゃつたよ」

「ふーん……その割には嬉しそうじやない」

「ふふん、まーねー」

「ちょっと気になつたんだけど、その糸はなんだい?」

糸は枝に巻かれた糸を指さす。

「これ? これはね……仲直りの証、つてどこのかな

にとりは少し照れながら笑つた。外からほいっと変わらぬ旧都

の賑やかな喧騒が聞こえていた。

土蜘蛛（後書き）

今回もいやに会話があんなになつてしまつました。
さかまたです。

蜘蛛の糸つて同じ太さの鋼鉄の五倍の強さだと書ききます。 ですが無慈悲な心を持つていると簡単にぱつつりと切れてしまつんですね。

面白いですがなかなか扱いづらそうな代物です。

「さてと、そろそろ温泉を堪能しに行くとしますかー。」

「そうだね、誰かさんが遅れてきたおかげでちゅうどいい時間になつたよ」

梶は部屋に備え付けの風呂桶と手ぬぐいを手に取りながら軽く皮肉っぽく言つ。

「いやあ、照れるなあ
「褒めてなこみ、もう」

長い廊下にからん、からんと下駄で歩く音が一人分響く。床は板張りで、顔が映りそうなくらい磨かれている。下駄で歩くと傷がつきそうで、にとりは少し磨いた人に申し訳なく感じた。

「泳ぐのは行儀悪いよ、ことりー」「浴場つてどれくらいでつかいのかな?」「泳げるくらいかな?」

「冗談だよ、冗談」

「さりが言ひと[只]談に聞こえないんだよなあ……ん？」

「すいません、ここまで来ていただいたのに……」

二人が入口の大広間まで来ると、なにやら短髪の女性が眼鏡を掛けた瘦せぎすの男性にぺこぺこと頭を下げていた。

「ンフフ、あなたのセ二ドはありますよ。それで、気晴らしに酒場をはしげ」しましょうか。せしあたり十軒ほど。ここのお酒は美味しい

「……ばば」

女性は苦笑すると、男性の後をついて旅館の外へ出ていった。

「何かあつたのかな？」

「ああ？」

桜は肩をすくめた。

「ま、いつか。気にしない気にしない。すいませーん！　温泉入りたいんですけどー」

「ひとりはぱたぱたと受付の方へ走つてこぐ。

「ええつー？　温泉に入れないってどうにうこと？」

しばらべ受付で話していたにとりが大声をあげると、桜もビックリしたと走つてくる。

「すいません。さつき仙人と名乗る方がいらして『じーじー』の温泉からは危ないガスが出ていて危ないから密を入れてはいけない』とかなんとか……」

受付の気弱そうな青鬼が申し訳なさそうに頭を下げる。

「えー、そんなあ……」

「ほんと、すいませんねえ。こればっかりは何ともなりませんから

……

「うー、桜はどうする？」

にとりは落ち込んだ表情で振り返り、少し困った顔をしている桜を見る。

「……ちょっと文さんと連絡したこと。すいません、『じーじー』電話つてありますか？　妖怪の山につながるの」

「はい、あちらに」

一人は受付の指さした方向を見る。そこには黄緑色の電話機が十数台置かれていた。

ここ最近いきなり増えたらしー。

「長くなるかもしれないから、にとりは好きに街をまわつていいよ。

終わつたら向かいの居酒屋で飲もつ

「……うん、わかった。また後でね」

「ひとりは蜘蛛の糸の強さをその仙人とやらに会つたらいとん文句を言つてやるか、と思つた。」

「さて、えーっと？」

梶は受付でもらつた硬貨を入れ、見慣れないプッシュボンに少し戸惑いながら上司の家の番号を押した。

秋の神が張り切つてゐるからだらうか、妖怪の山の木の葉はもう鮮やかに色づき始めている。

「いいですかはたて、新聞といつのは話題の新しさ、オリジナリティ、そして何よりもインパクトが重要なのです！」

小綺麗にまとめられた部屋で射命丸文は雄弁に語る。机の上の書類は整然と並べられ、天井に縦横に張り巡らされた糸には写真が吊るされている。

「まあ、私も今まで新聞やつてきて痛感してゐるけどさ……文が偉そ

うに語るほどのもんじやないよ。そこまで私も馬鹿じやないし……」

茶髪を紫のリボンでツインテールに束ねた鴉天狗、姫海堂はたては片腕で頬杖をつき、もう片方で前髪をいじりながら氣怠そうに言う。

「そう！ そのだるそうな話の聞き方！ まずそこからいけないのです！」

文は大げさに仰け反りながらびしつゝはたてを指さす。毎回歌舞伎か少年マンガのワンシーンのようなオーバーリアクションをされてははたても暑苦しくてたまらない。

「まずは記者として相手の話を聞く態度をイチからじりりん、と電話の鳴く音が文の言葉を遮る。

「……電話だよ、文」

「わかつてますよ……今こことなのに……はい、清く正しに射命丸でござります」

「……嘘つけ」

文の変わり身の速さに呆れ半分、感心半分で頬杖を突きながらはたてが呴く。これほど裏表がはつきり変えられる妖怪も少ないだろう。彼女の幻想郷最速とは飛ぶ速さだけではないらしい。

「もしもし、文さん？」

桜は無事に電話がつながったことにほほとした

「ああ、桜ですか。旧都はどうですか。楽しんでますか？」

「ええ、まあ。皆さん氣さくで優しいです」

「桜い、それは私への嫌味ですか？」

「ま、まさか！ そのよつなことは微塵も……」

「いきなりうろたえ始める桜に文はくすつ、と笑った。

「冗談ですよ……あ、取材はどうなつてますか？」

文は最後に声を少し低くしてきく。

彼女の言ひ計画とは、桜に温泉（特に女湯）を撮つてきてもらひ、それを載せることで新聞の妖怪の山での講読者を伸ばそうとう、樂園の最高裁判長に即地獄行きにされそうな計画だ。

「あー、その件なんですがね……」

桜は申し訳なさそうに温泉が閉鎖されてしまつたことを話した。

「はあ！？ なんですかそれは！」

「つまり文さんの計画は失敗ということに……」

「…………わかりました。桜、取材はもういいです。せっかくですし、あなたは『休暇』を楽しんでください。では」

文は精一杯穏やかな口調を繕い、桜の返事を待たずに乱暴に受話器を床に叩きつける。受話器越しに桜とはたての「ひつ」という声が重なる。しばらく呆然と立ちつくした後、文は凍りつくような笑顔ではたてをじろりと見る。

「な、何よ」

「…………はたて、鰻屋にこきましょ？ こんな日は飲まなければやつ

ていられませんから

「ちょ、ちょっと！」

文はひきつった笑みを浮かべながら無理矢理はたての手首を掴む。

「あ、一緒に来てもらいますけどはたて、あなたのぶんはちゃんと

払いなさいね。いいですね？」

「ひでえ……」

はたては新聞のこと以外に関しては文は反面教師だな、と引きず
られながら思った。

「……文さん怖い」

電話越しに一部始終を聴いた桜は率直な感想を呟き、はたての無
事を祈つてから、旅館を後にした。通りの騒がしさと明るい雰囲気
が少し、今の桜には残酷に感じられた。

旧都の外れには真赤な橋が架かっている。その橋の先にあるのは、
提灯や篝火の灯が照らす旧都とは異なる、真つ暗な闇。

名前は誰が呼んだか渡る者が途絶えた橋。旧都がいつの間にか觀
光地のような扱いをされるようになつた今では名前負けしている気
もしなくもない。

「さーて、ヤマメさんの蜘蛛の糸は実際どのくらい強いのかなー？
実験実験！」

にとりは竿を軽く振つて川に釣り針を投げ入れる。

「……釣れないなあ」

待つこと三十分、未だに竿はぴくりとも動かない。

「あら、ここで釣りをするなんて物好きもいたものね」

にとりに声を掛けたのは、透き通つた碧色の眼にくすんだ枯草色

の髪をした嫉妬の塊、水橋パルスイだった。

「あなたみたいな子じゃあこここの川の奴らは釣れないわよ」

「むかっ！」

「そうね……だいたい

「

「おーおー河童のお嬢ちゃん、こんな美人を釣り上げるたあ、大したものだ！」

「……あいつぐらいガタイがよくなくちや

パルスイは少し赤面しながら空色の着物を着、手には杯を持った

鬼の四天王『力の勇儀』こと星熊勇儀を指さした。

「ははは、パルスイ、なに赤くなつてんかい？」

「……あなたの無神経さを見てて恥ずかしくなつたのよ

「おいおい、心外だなあ。あたしゃひとつてもナイーブな奴なんだよ

？」

「あなたみたいなのがナイーブなら、幻想郷の奴らはみんなあなたにちょっと声を掛けられただけで血を吐いて卒倒しちゃうくらいナイーブってことになるわね」

「ははは、違ひねえ

パルスイの鋭い返しにも、勇儀は快活そうに笑う。

「あ、あの～

「おつと、仲間外れにして悪かつたね。どれ、お詫びにあたしがここでの釣りの見本を見せてあげよう

勇儀は持っていた杯を置き、にとりの釣竿を借りる。

「河童のお嬢ちゃん、釣りつてのは待つことが肝要だ。だがな……

勇儀は餌を袋ごと川に放り込む。するとにとりが見たこともないほど大きな魚の影が餌に迫る。

「たまにはこっちから動くつてことも必要だ！」

その大きな影めがけて勇儀は竿を思い切り振り上げ、釣り針を投げ込んだ。投げ込まれた釣り針は勢いよく影に突き刺さる。

「よし、かかった！……おらあ！」

獲物がかかつた、というよりも引っかけたの方が正しい。勇儀は

力いっぱいに竿を引くと、三メートルは優にある大魚が宙を舞い、水しぶきが真赤な橋の欄干をぬらす。あまりの迫力ににとりは軽く悲鳴を上げて腰を抜かしてしまった。

「パルスイ、ちょっと竿、持つてくれ」
腰を抜かしているにとりとは裏腹に、全く微動だにせず隣に立つパルスイに勇儀は釣竿を手渡すと、指を鳴らしながら大魚を視界の真ん中に收め、

「ふつ！」

拳を大魚のじてつ腹に叩き込んだ。大魚は地響きを立てて倒れこむ。いつの間にか集まっていた野次馬から割れんばかりの拍手が巻き起こる。

「……とまあ、こんな感じかね。ここいらの魚は地上のやつらよりちつとばかしかいからね、身体の小さい嬢ちゃんには分が悪いかな」

勇儀はまだへたりこんでいるにとりの手を取つて立たせると、パルスイは黙つてにとりに釣竿を渡す。

「あ、ありがとう……」

「素直にありがとうと言えるあなた、妬ましいわ」

パルスイはにっこりと笑つて言つた。台詞と表情とのギャップににとりは目を白黒させる。

「ははは、悪いね。ここつはなんでもかんでも妬ましく感じちまう困つたちやんなんだ。こんなに頼りになる奴が身近にいるつてのによお

「あら、お節介焼きの間違いじゃないかしら？」

「ははは、こいつめ」

パルスイがすかさず修正すると、勇儀は彼女を小突いた。
「さてパルスイ、今からこの……ええと」

「川鮭ね」

「そうそう、川鮭を肴に一杯やろうと思つんだが……一緒に飲まないかい？」

「ふふ、喜んで」

勇儀が照れくさそうに頭をかきながら聞くと、パルスイはそれに笑顔で返した。

「お嬢ちゃんも頑張つてなー」

「は、はいっ！」

大魚を引きずりながら和氣あいあいとした雰囲気で一人が去つていくと、ざわざわと騒がしかつた野次馬達もぞろぞろともと来た道を引き返して、多くは通りに乱立する酒場に入つていつた。彼女の一本釣りの話題を肴に飲み明かすのだろうか。

「……熊みたひな人だつたなあ」

一人橋の上に残されたにとりは小さく呟いた。

「まだ釣れない……どうしてかなあ？」

それからさらに一時間にとりは釣糸を垂らしているが小さい魚すらかかる気配がしない。

「釣れますか？」

「ひゅい！？」

もうやめようかな、そう考えていた矢先に声を掛けられ驚いたにとりが振り返ると、桃色の髪にショーンキヤップを被つた女性がにとりに笑いかけていた。

「い、いえ……さつぱりです」

にとりは少し戸惑いながら答える。

「そうですか。ちょっとお借りしますよ」

「あ！」

桃色の髪の女性は包帯の巻かれた右腕でにとりの持つていた釣竿を手に取ると、糸をたぐりよせた。

「ふむ、蜘蛛の糸とは珍しいものを使うんですね。おや、これは……」

針^{ハリ}と喰い千切られてしまったのだろうが、糸の先に付けたはず

の釣り針は忽然と姿を消していた。これではいくら糸が強からうが形無しである。

「ええと、これは、その……」

「にとりは途端に恥ずかしくなつて口」もる。

「素晴らしい！」

「へ？」

しばらくの沈黙を破つたのは女性の驚嘆の声だつた。

「古の太公望呂尚様に倣つて釣糸を垂らして瞑想をしていたとは……」

「いや、失礼しました」

「いや、私はただ釣りを……」

「謙遜しなくとも結構ですよ。私にはちゃあんとわかつていますから」

女性はぽんぽん、とにとりの肩を叩く。いけない、この人は話しだしたら止まらないタイプだとにとりは直感した。

「いやはや人間の数倍長く生きてきた私ですが、まさか間欠泉の温泉への転用を止めに来ただけでしたのに……旧知の友に会えて、さらに久しぶりに同じ仙人を志す方に出逢えるとは……これほど素晴らしいこと日はそうそうありません」

彼女は感慨深そうに腕を組んでうんうんと頷く。

「同じ仙人つて……あなたまさか！」

「あら、自己紹介がまだでしたね。私は茨華仙と申す行者……まあ、仙人と呼んだ方がわかりやすいですね」

自らを茨華仙と呼んだ女性は胸に挿した牡丹の花に手を当てながら答えた。

「あ……」

にとりは思い出した。彼女は確か博麗神社で常温核融合の実験をやつたときに八坂様や巫女たちと地獄の間欠泉がどうのこうのと話していた人だと。

「そつか、あんたが……」

にとりの中にふつぶつと怒りが込み上げてくる。そうだ、こいつ

のせいで楽しみだつた温泉に入れなくなつたんじゃないか。一田会つたら思いつきり文句を言うんだつた。うつぶんもたまつてるとこだし、全部ぶつけてやるつー

「あんたが余計なことを

「おおそりでした」

「はい?」

「余計なお世話かとは思いますが、先達として言つておきます

華仙はにとりの手を握つて彼女の目を凝視する。

「え、あ、あの……」

「仙人への道は厳しいです。桃の木の植え方や、炊事や洗濯、薪割りなど、本当に修行なのか? と、思つてしまつこともあるでしょ

う

「は、はあ……」

にとりは穏やかながら堂々と語る華仙に口を挟めないでいる。

「しかし、へこたれはいけませんよ。たとえ友人に『そんなのは修行なんかじゃない、使用人のやることだ。お前は騙されてるのさ』などと嘲られることがあつても、妻に愛想を尽かされても……おつと、話し込んでしまいましたね。失礼しました。では私はこれで貴女が立派な仙人になれることを願つていますよ」

華仙は言いたいことをひとしきり言い終えると、地上へ続く方へ歩いていく。

「ああ、それと」

華仙は何か思い出したように振り返る。

「もしそれでもくじけてしまうようなことがあつたら、私の家に来なさい。私とペットたちがみつちり修行させてあげますから」

「はあ……雛よりめんどくさい人だつた……」

再び一人橋の上に残されたにとりは深いため息をつく。彼女の頭の中には仙人イコールめんどくさい人という方程式が出来上がつて

いた。

「あ、酒場で桜と飲むんだった……」

「ひとりはふらふらと街の喧騒の中へと入ってこく。お酒くじくは氣兼ねなく飲めるだらうといつ希望を抱いて。

「へいらつしゃー！」

「ひとりー、こつちこつち！」

酒場は外よりも騒がしかった。

「何にしましょう？」

「えーっと……ビールと、あと漬物

「何の漬物で？」

「あー、……ナスとキュウリで

「へい。そちらさんは？」

「日本酒『大江山』と、手羽先とトンカツ

「合点承知！」

にとりは途切れ途切れになりながら、桜は物おじせずこなつきりと注文した。

「肉ばっかりなんて、がつたりいくねえ桜

「ただぶらぶらしてただけだつたけど疲れちゃつたからね。どこも

かしこも騒がしくつてさあ、落ち着けないのなんの」

「あー、わかるかも。そうだ！ 聞いてよ桜、私仙人さんに会つちやつてさあ……」

にとりは堰を切つたように話しあう。会つたときの雰囲気やら、文句を言あうとしたらいきなり長話をされたことやらをことつの主観たつぷりに話した。

「仙人ねえ……それだけ聞くとおしゃべり好きなお姉さん、つて感じもするね……」

「そうそうー、仙人さんつてもつと頭が長かつたり、白い鬚を生や

してそうなイメージだつたんだけだなあ

「それは偏見だよ……」

桜は手羽先を、にとりは漬物をかじりながら話す。ビハリも味が濃く、酒によく合つた。

「そうかな？　あ、それとね、鬼の四天王の勇儀さんにも会えたんだよ。それでね……」

「……」

「……でさ、勇儀さんがグイーッって竿を引くとせ……でつかい水しぶきをバッシャーン！　つてたててさ……見たこともないくらいでつかい魚がさ、グワーッ！　つて口を開けてこっちに迫つてくるわけ。それを勇儀さんが拳でドグシャアッ！　つて殴つて倒したのかつこいいでしょ？」

「……その勇儀さんの一本釣りの話、もう七回は聞いたよ……」

べりべりに酔つ払つたにとりの話につんざりした桜はひびひと酒を啜りながら言つ。座敷にはにとりが飲み干した空のビール瓶が数本置かれていた。

「ふえ？　そうだっけ？　……むぐう……」

「……」

にとりはぐつたりと空の皿に突つ伏する。かすかに寝息も聞こえ始める。

「……」

「ここり？　……寝ちゃつたか。しゃべるだけしゃべつて、まつたくいい」身分だねえ……。すいません、お勘定

「へい」

桜は伝票に記された酒の安さに驚いた。さすがは街じゅつが宴会会場と呼ばれるだけのことはある。

「よつと」

桜は酔いつぶれたにとりをおぶつて居酒屋を出る。まだまだ口とこつたところだらうか、田都のどさけやん齧あま止みやうこない。

「 いとも賑やかだと、逆にちゅうとこづらくなつちうな……
桟は喧騒にかき消されたるほど小さくしぶせられた。」

旧都（後書き）

台風が近づいていて風が強いですね。（9月3日現在）
さかまたです。

今回は茨華仙さんに登場していただきましたが……ただの他人の話を聞かないキャラになってしましましたね……。
それと勇儀とパルスイは短編を別所で書いてからまた書きたいなあ、
と思っていたキャラでしたのでなかなか楽しく書けました。

気がつくとにとりは地上へと繋がる大穴を、蜘蛛の糸を伝つて登つていた。酔いが残つてゐるせいか頭が痛い。ふと頭上を見ると出口からかすかに差し込む光が目に染みた。

登りきるにはあとどれだけかかるだろうか。半分以上は登つてたと思っていたが、一向に出口に近づいた気がしない。

「とりはふう、と糸を手繰るのを止め一息つく。片手をついている土の壁がひんやりとして心地よい。

「あらあら、こんなところで蜘蛛の糸にぶら下がつて、何がしたいのかしらん?」

しばらく休んでいたにとりが驚いて顔を上げると、雛がにとりを見ていた。表情は良く見えなかつたが、どことなく背筋が凍るような、不気味な雰囲気がした。

しばらく休んでいたにとりが驚いて顔を上げると、雛がにとりを見ていた。表情は良く見えなかつたが、どことなく背筋が凍るような、不気味な雰囲気がした。

にとりは恐る恐る厄集めはしなくていいのか、と訊こうとしたが、どうしたことか声が出ない。いよいよ気味が悪くなつてきだ。片手をついている土のひんやりとした感触すら気持ち悪く感じてくる。

「でも蜘蛛の糸なんかでこの大穴を登りきるつなんて、にとりも命知らずねえ」

雛が糸を指でなぞり、はじく。

やめて、にとりは叫ぶ。が、声は出ない。心臓を直に握られているような感覚。蜘蛛の糸がそう簡単に切れないことはわかつてゐた。それでも、雛が糸を揺らす度に恐怖を感じる。

「やめろって言つてゐるのがわかんないの!? その手を放せつつてんだよッ!」

自分で驚くほどの大聲でにとりは叫んだ。すると突然糸がぱつり、と音をたてて切れ、ぐらりと体制が崩れる。

背中に寒い感覚が広がり、全身からさつと血の氣が引いたあと、嫌な浮遊感がにとりを支配した。

「うわあッ！」

びくん、と痙攣したように体が跳ねた。にとりは息を切らしながらゆっくりと首を左右に動かし、周りを見回す。まだ背中には嫌な寒気が残っている。

一人で暮らすには少し広い空間を無駄に、窮屈に、そして雑然と並べられた雑貨や発明品、なるほど確かに自分の部屋だ。

「……夢か」

ほつと胸を撫で下ろす。本当にあの高さから頭から落ちたら、嫌でも地獄にずっと住むことになつたんだらうな、そんなことを思つとにとりは笑つた。

少し緊張がほぐれ、急に視界が広くなつた気がした。にとりは窓の外を見る。

空は青く晴れ渡つていた。木々の鮮やかな緑と所々に見え始めた薄紅葉がまぶしい。紅葉の秋、と呼ぶには程遠いが、秋を感じさせるには十分だ。

「静かだなあ……」

静けさの中、にとりは一人呟いた。地底にいた時は騒がしいと感じたが、帰ってきた今となつてはその喧騒すら懐かしく思えてくる。結局あの後は一日酔いで寝込んでたなあ、などとしばらく地底での出来事を思い起こしていたにとりだったが、ずっと感傷に浸つてもなあ、と思い普段着に着替え、出来合いの物で食事を済ませ

ると、行くあてもなく外に出る」とした。家を出た途端、涼しげな秋風がにとりを包む。

さて、今日は何をして過ごすつか。

鍵山雛は風に髪を、裾をなびかせながら楽しそうに踊っていた。足下で無数に咲くコスモスもまた風に揺られ、踊る。

山中に密やかに存在するこの花畠は、季節ごとに色を変える。春は菜の花が黄色に、夏は雛げしが紅色に、秋はコスモスが青紫に、そして草木が眠る冬は雪が真っ白に、それぞれ鮮やかに彩る。雛はそんな四季折々の変化を見せるこの場所が好きだった。

「あら雛、『きげん』よ！」

「秋はいいものでしょ？」

声に気づいた雛は踊りを止め空を見上げると、彼女と同じく神である秋静葉と秋穂子が寄り添うように飛んでいた。一人はたわわに稔った麦の穂のように輝く揃いの金色の髪を揺らし、雛に笑いかける。

「あら、静葉に穂子じゃない。『きげん』よう。最近めつき山が秋めいてきたけれど、あなた達の仕業かしら？」

雛も笑い返す。彼女たちは秋以外はあまり外を出歩かないため、雛がこうして会うのも久しぶりだ。

「そうね、確かに私は滝の周りを秋めかせてきたわ。これがほんとのフォールオブフォール、つてやつね！」

静葉が「決まった！」という顔をする。花畠を秋とは思えないほど肌寒い風が吹き抜け、微かにコスモスが揺れた。

「……静葉、どうしたの？ いきなりドヤ顔しちゃつて」

「焼き芋の食べすぎかしら？」

暫しの硬直の後、雛と穂子は揃つて首を傾げた。

「……好き勝手言つてくれるじゃない。私が渾身のギャグをかましたっていうのに。あと穂子、焼き芋の食べすぎなのはあんたよ、あんた」

そのまま静葉はふて腐れた顔をしながら地に足をつける。するとふつと風が吹き、静葉の足下の紅葉が舞つた。

「ギャグ？ どこが？」

「どこかしらね、雛さん」

雛と穂子は再び揃つて首を傾げる。

「……あんたたち、まさかやつた本人にギャグの説明をせるの？」

「そうよ。何か問題でもあるの？」

「だつて姉さん、わからないもの」

怪訝そうに静葉が一人の顔を覗き込むよつこしてきくと、すぐに答えが返つてきた。

「あんたねえ……自分で自分のギャグを説明する虚しさがわからないの？」

「全然。あなたが冬を毛嫌いする気持ちくらいわからないわ
「姉さん、私もよ」

またも即答。

「ぬう……天然コンビね……あんたちは喋つてるだけでもギャグになるつての。いいわ、教えてあげる」

静葉はだるそうにどつかりと腰を下ろすと、つられて雛と穂子もゆつくりと腰を下ろす。

「いい？ まず秋は英語で『fall』よね

「せんせー、秋は『おーたむ』じゃないんですかー？」

穂子が手を上げてきく。

「そうともいう。で、滝のことも『fall』つていうの

「……それで？」

静葉が穂子の質問を軽くいなすと、今度は雛が寝そべつて頬杖を突きながらきく。

「それで……『faーー』がダブルマークになってるでしょ？ それがオチ」

「わかりづらいし、そこまで面白くもないわね」

「ぐはあっ！」

雛の歯に衣着せぬ言葉に静葉は仰向けに倒れ込む。

「姉さん気をたしかに！」

穂子は駆け寄つて静葉を抱き起しすと、芝居掛かつた口調で言つた。

「くつ、やつと我が世の春が来たつてのにこの厄神ときたら……」

静葉は呪うように呟く。

「落ち着いて姉さん、今は秋よ」

「穂子。そりや比喩よ、比喩…………もう、なんか思いつきり疲れ

たわ。穂子、人里に行つてちやほやしてもらいましょ」

静葉は穂子の手を借りて起き上がる。

「それはいい考えね。……それじゃ雛さん、そういうわけだからこ
きげんよ～」

「ええ、さようなら」

雛は飛び去つていく一人に手を振つた。空には紅葉の赤が舞つて
いた。

犬走柵は哨戒の仕事のかたわら、空から衣替えを始めた妖怪の山
を眺めていた。麓にはまだ緑が残つてゐるが、山の頂に近付くにつ
れ紅葉が目立ちはじめ、中腹の辺りなどもう秋の盛りと言つても過
言ないほど鮮やかだ。秋の神がおわすのはあの辺りなのだろうか、
と柵は思った。哨戒の仕事は千里先を見渡す程度の能力の持ち主
である彼女に重点的に割り当てられる。天狗の縄張りに近づく者を

素早く発見し、排除する。広い視界を持つ彼女にはうつてつけの仕事だ。

とはいってもそのように危害を与えようとする妖怪も人間も今は滅多に現れない。そのため桺はよくぼんやりと山を眺めていることが多い。

桺は軽く伸びをすると、休憩のために一度山に降りることにした。休むのにちょうどいい太さの枝にとまり腰かけると、桺は弁当箱代わりの笹の葉の包みを解いた。今日の昼食は握り飯が一つだった。腹持ちは良いが、物足りない。

「……干し肉でも持つて来ればよかつたな」

桺は握り飯を頬張りながらも周りを警戒している。

「……む

桺の耳が微かに動き、穏やかそうな目つきが鋭く変わる。縄張りに近づく者を発見したのだ。

桺は腰に提げた反り身の刀を抜き、こほん、と一つ咳払いをした後、侵入者の近くの枝に飛び移る。一本歯の高下駄で細い枝に立つ、こうした人間には到底できない「天狗らしさ」を出すのも哨戒天狗には肝要だ。

「おい、そこの人間。ここから先は天狗の縄張りだ。早々に立ち去つてもらおうか」

桺はどすの効いた声で侵入者に声をかけた。

にとりは川で水切りをして遊んでいた。

手を離れた石が十数回水面を跳ね、沈む。手首のスナップを利かせて石を投げ水面を跳ねた回数を競う、これだけの遊びなのにどうしてこうも奥が深いのか。もし石を水切りに最適な重さ、形状に極限

まで加工して、力学的に完璧なフォームで投げたらどれだけ跳ねるのだろうか、想像しただけでにとりは楽しくなつてくれる。

「よーし、今日は水切りに最適な投げ方を研究……おや？」

にとりが張り切つていると、陽の光を反射して輝く川の上流から、鮮やかに紅く色づいた紅葉が数枚さらさらと流れてきた。

「綺麗な紅葉……山の奥はもう秋真っ盛りなのかな？」

にとりは川に入つて紅葉を拾い上げると、周りの木々を見る。葉の先が微かに色づいていたり、まだ青かつたりとまちまちであり、ここも紅葉の秋には程遠い。

水切りの件はまた今度考へることにしたにとりは川岸を紅葉が流れてきた方向へ歩き始めた。

「紅葉がたくさん落ちてたら集めて焼き芋でもしようかなー」

にとりにとつての秋は、食欲の秋だった。

彼は森の中を歩いていた。踏むとサクサクと音をたてる落ち葉が秋を感じさせるが、木々の間から見える空は真夏のようないつだ。

山全体が燃え上がるような紅葉で色めくようになるのはいつだらうか、地獄に遊びに行つてくると言つてからしばらく会つていない親友は元気だらうか、などと考えながら、彼は山の奥へ奥へと足を進めていった。

彼にとつての秋は、紅葉の秋。

秋めく日（後書き）

ずいぶんと更新が滞ってしまいましたね。すいませんでした。
書き始めた頃は秋の初めだつたんですが、もう中じゅうにまでなつてしましました。

余談ですが、今年の秋は寒いですね。毎年言つてゐるような氣もしますが……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5753t/>

河城にとりの科学的？生活

2011年10月10日03時24分発行